

1-2-4 県指定・野首家

〈県指定〉昭和 37 年 2 月 12 日

〈所有者〉高山市

〈所在地〉上岡本町 1 丁目 590 番地 飛騨民俗村構内

(旧所在地 片野町林)

〈時代〉元禄以前

〈員数〉1 棟

主屋 (1 棟) 桁行 15.2m、梁間 10.8m、切妻造、両面下屋付属、長檜葺石置屋根

この建物は、元禄 8 年 (1695) の検地帳や当時の絵図に記載されている家と、建物面積、位置が一致していた。元禄検地以前の建物と推定される。元禄検地水帳に「しものくび 間口八間半 奥行六間 屋舗云々 八兵衛」と記載され、19 代目の野首秋蔵も、通称「片野の八兵衛」と呼ばれた。昭和 37 年、野首氏から本建物の寄付を受け、3 月に現在地へ解体材を集積した。同時に、解体調査を行ない、昭和 40 年 10 月から翌年 2 月までかかって復元修理を実施したのである。その際「オエ」や「ニワ」の床板を撤去し、裏側の縁側なども取り除いて旧形態に復元をした。

建物内部は、土座生活の「オエ」が中心に位置し、右側に「デイ」、「オク」、「ナカオク」、「ダイドコ」とカギ形に並ぶ。左側には「マヤ」、「ニワ」が配置されている。土台はなく、垂木は藤^{つる}蔓で縛り、壁は板張りで窓は少ない。構造材も化粧材もほとんどアカマツが主で、一部クリを用いて飛騨の農家らしい建築部材となっている。柱の加工は片刃の鉾ハツリである。梁や桁の加工は江戸中期後に発達したと思われる「はびろ」ハツリではなく、飛騨型の「まんきち」斧でハツリ、その加工跡を残している。板類の加工は大^{おお}鋸^が引^びきのあと 1 枚^さ鉋^か削^めりで仕上げているので、大きな逆目^{さかめ}を残している。

建物の外観は、飛騨の中央部に発達した^{くれぶき}檜^{おろ}葺石置屋根葺き下し付である。小屋梁が母屋桁と併行した架構法は、軒の高さを制限されたり、低い建物を建てる場合に採用される架構法で、構造上直交した梁より弱いはずだが、止むを得ない架構法で、この地方でも古い建物に多く見られる。旧田中家住宅とともに、飛騨では最も古い民家の 1 つである。

参考文献

『高山の文化財』26～27 頁 高山市教育委員会発行 平成 6 年